

雙魚堂坐右錄

乾

明治四十一年十一月一日起筆

特別
14
1919
227



雙魚書屋右録

明治四十年十一月一日起筆

○早稲田八勝：就て同人の意見紛々たる
しが、余の意見をも以て左の如く
決定す

目白梅雲 春

八幡物雨

駒駐乱虫 夏

関口元瀑

落合帰牛 秋
雅司紅葉
戸山露月
字を曉雪 冬

○十月三十日 本所携行安田君の由
ニ古物を拍賣するに品評するに人並みと
賞金と名づく。長し他のお林荒吉岡
田村雅赤松一内田貞、和の菊吉兼、
余の七尾会多し。余も近り会多し
多し。○北村神めし矢し余も出、海君も

あやうの由余の四名なるにきこし、あり
余も、まゝ自筆、秋の秋、物終、若古
姓、に用り、筆、又句、然、海、出、双、六
え、福、聖、書、回、お、を、推、の、吉、り、り、(三、
打、雅、ま、古、残、あ、う、え、松、海、此、り、)の、あ
つ、え、了、錢、湯、一、喜、を、示、し、和、多、き、天、文
二十三日、親世元頼の奥書あり、福也
若加の言を其傳一二を、出、ち、り、主人
の示し、る、よ、の、中、を、而、も、思、ひ、ん、る
と、離、念、三、國、の、畫、き、は、能、か、ル、夕、一
函、画、の、繪、詞、も、三、國、を、畫、し、出、依

の墨を洗ふおとし其の意なきはるゝ
とゆつと海の款あり其の又の意なきは
ふ丈聊く珍しくしと思ふ

○説文を信ずる大倉の極高のものを
と知入るゝ勅のきり印外二三品を
自分七割り見るゝ備不狭きはるゝ
を給の給るはの出る精治とわたりし
と貴戚也富目と記するゝ内而も
せしゝものも稲田川の古幅三
ふらえまけはるゝも作を
んゝゝ稲田川と左手より
東林堂

拜啓益御清穆奉敬賀候今回別紙旨趣ヲ
以テ來十月一日日上野東照宮社務所ニ於テ
説文會臨時大會舉行致候間萬障御差繰
御光臨被成下度右御案内申上
明治卅年十月 説文會幹事
市島 謹吉 殿



午前十時 許慎及狩谷掖齋等祭典舉行
午後 圖書拓本類展觀及談話會

ことごとくあつた氣韻の生動さをもつ味の工夫
をなすことゝして此用筆の運筆のゆるやかな
閑居するものゝ如し……この書は……
の陰影の工夫を仕るいふ論を畫する
濃活むけの明暗の工夫を……
るのが……
陰影を……
り方と合はるる……
動し用い……
物もある……
と……

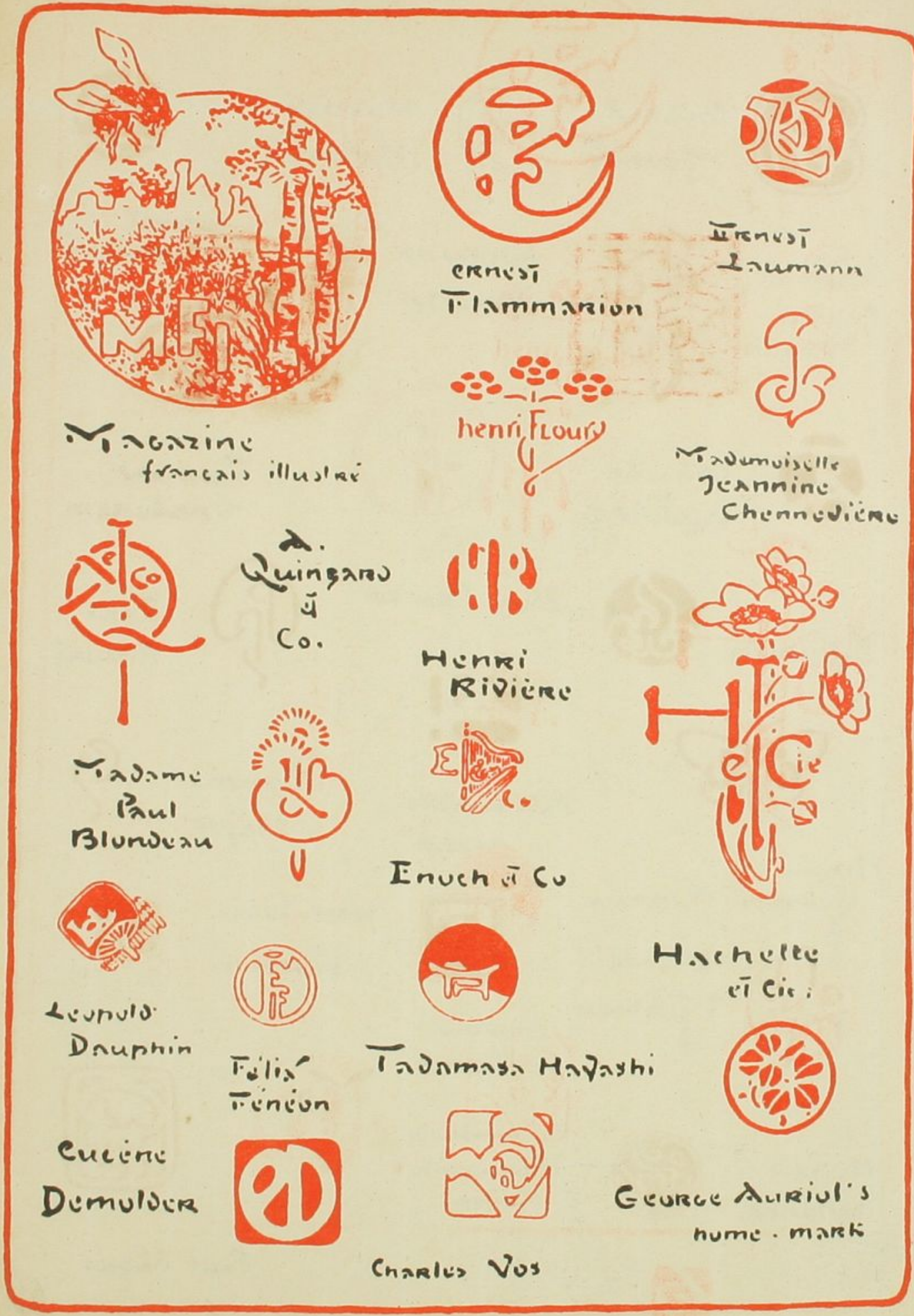
の染態柄致と畫紙よく表のりか我筆
の味の味……
又後我筆の画と比較して左の如く……
拙者の……
的簡潔の……
ニゼリユ、マイクランゼロー、ヤ、ラフア、
の素画と我の……
仕方の……
を……
……
……



万う確う優うをそる物と思ひたる。そし
其多岐の折れも少論畫の全画の邊
れそそりひらふ併し元も多く其
確確健勁なる事と云う候て此
こそその身を被えあはの字あ画之免
角人間的の具方氣を脱しうのい
少論畫のあはも元も眼正に
事つて特に西人の字あ画を標準
を人間的とす其標準を人間的と
眼ううとす我んの佛畫を却てお
しうとすといふ夫の不動なる面

東林堂

が憤怒のおもはれを身もそんよおを
せぬのうぬが如く因満平和の作る西
洋の字あ画の例うとすといふも
そのうちが我の標準をそりせぬ
ぬ而此を怒らそとを身とてわす
ぬと因満なる世の物とすといふ
本意のうぬが如く出来たるを
ひら

○此の徳川家、徳さんとす。其標準
下の全標のうぬが如く印を刻すや
台命はうぬが如くすはて大款



余り来りて其の全のまじり
 入るる女性の命を過す
 其の体こそらげの如く
 ありて動揺する体とし
 余のまじりて余のまじり
 細の表方力する二顆即ち
 こんとく、白文を宛て
 玉印の如く漫湖を宛て
 余のまじりをめぐる材
 翁之る人も中多也
 四十一号一十月初日記



其の指を^{北條}北條とせし一説見ても其の如く其
以て指者方々なる蜀川勝政と古しある
画を指を細微の如く其の細き工を
生るるを李龍代ともその名なきもの也
乾隆帝一政と傳く清画也其の如く
指しあるは國の上部を畫せん其の命の
對するは帝の宸翰なりと云ふ西中
の山を指し其の細き名を注ぎ
半龍の如く其の指は日代名の大
十数氏の跋文あり紙のつき目も或
個々々々行々の印を指し玉印也といふ

清画

くまうく^{北條}北條の中を刻の拙なる
ものも北條の指あり其の如く
画を北條とせし一説見ても其の如く
其の指を細微の如く其の細き工を
生るるを李龍代ともその名なきもの也
乾隆帝一政と傳く清画也其の如く
指しあるは國の上部を畫せん其の命の
對するは帝の宸翰なりと云ふ西中
の山を指し其の細き名を注ぎ
半龍の如く其の指は日代名の大
十数氏の跋文あり紙のつき目も或
個々々々行々の印を指し玉印也といふ

の

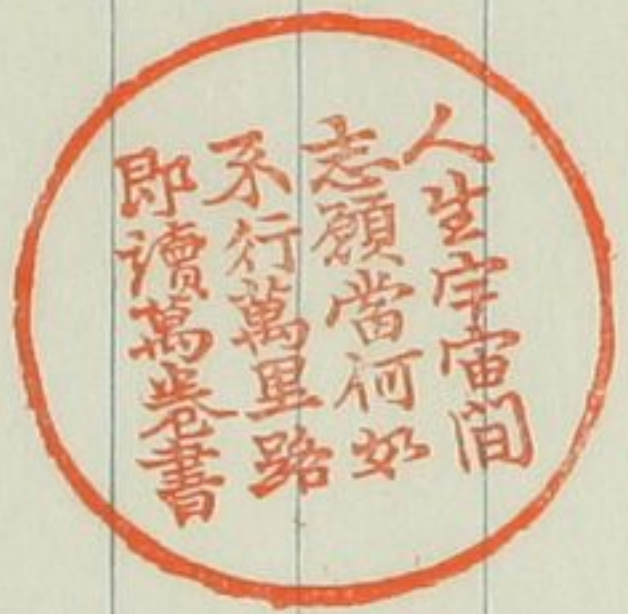
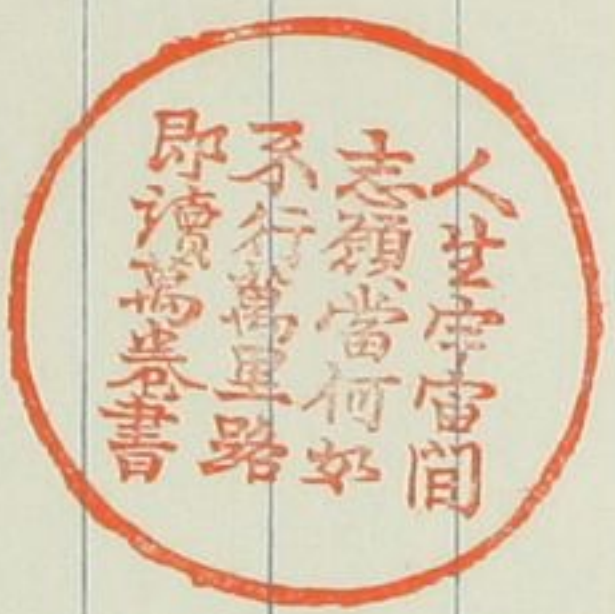
高し示したるも未だ其人のこころ由
○是利の家を福原城を其の支那を花
子、そのころの三十一谷人式の語をき
ありしとして帝國國も彼の支那に
語

油の敵は我た

我たとの四文字の基し

○来る六日(十日)と伝ふも由なき馬の
の志願なるもそのころの基し
長原の其の道は昔の道をたどりし
ゆりゆり早稲田の田舎にありて

續



のころは後免公をも其の
一八、校をみるに論議
の影も又その改作也
此印を其の道印をす
と钩を手にして印物
を刻せしむるも他は二
換印を心に語をすも其の
しるる記布しる也

○嵐心好む者此の嵐の是れを飲むるも
つく此に好む者此の嵐の是れを飲むるも
しあつては或を陽寺にてもあつて
是の可なり也

○山麻呂の暮、夕に井方所業三寺の
ありとて、早稲田八幡を造らむとて
こゝに入ると、此の寺も、
得たりし

○朝方とて、柳亭経表のり地一冊あ
り、表紙の元色し、
縁の字を附し、
様の一文字

柳亭

を大者し、
のあり、
あつては、
とて、

海老原一山

大貌利太泥

山崎美成

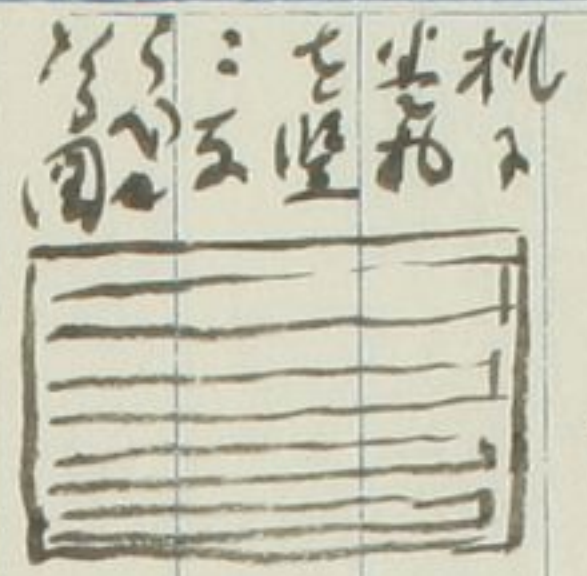
疑川

木林

人冬三

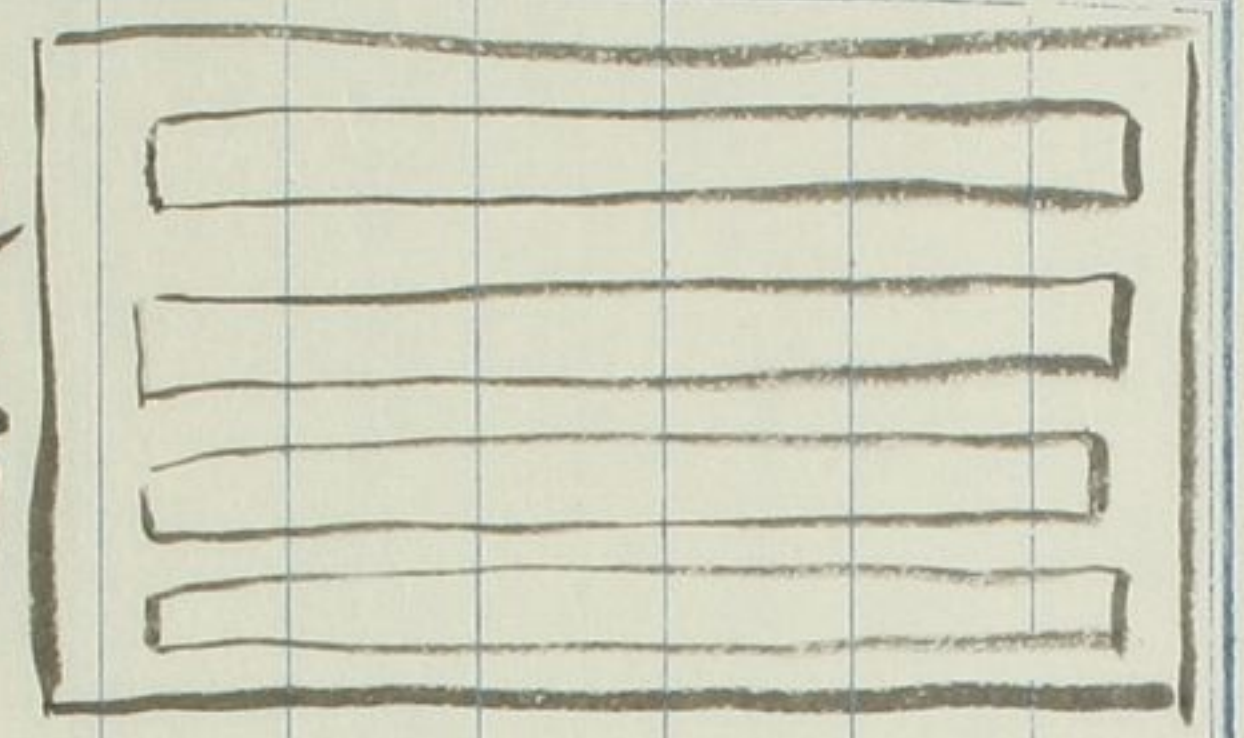
其二冊とす、實に余が未中の跡也

○ゆり馬の跡の志辰に廿其の遺(著)を海列す
高之家の吉(同)を慮(後)に供(見)と(取)し
本(口)土(日)考(考) 跡(見)を(予)しと(誠)之(を)海(列)
を(為)す、(関)境(を) (階)下(の)合(部)を(海)列(佈)す
え(ん)横(長)の(机)四(列)と(す)べ(し) 丁(刺)の(四)考(の)
幅(を)恰(も)吉(協)等(物)四(軸)を(監)主(と)す(べ)し
跡(地)を(存)せ(る)寸(法)と(る)が、(四)列
の(机)限(を)海(列)し(て)統(果)と(す)
ゆ(ん)出(陳)と(効)し(て)後(後)據(し)と(す)



机を四列の
幅を恰も吉協等物四軸を監主とすべし

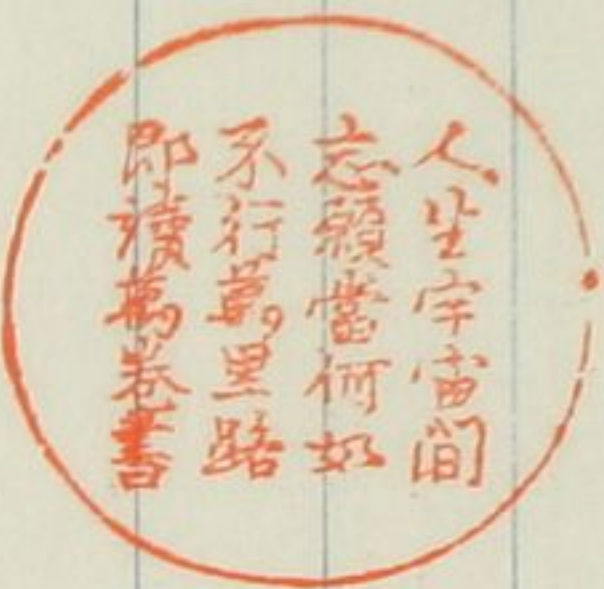
東洋書院



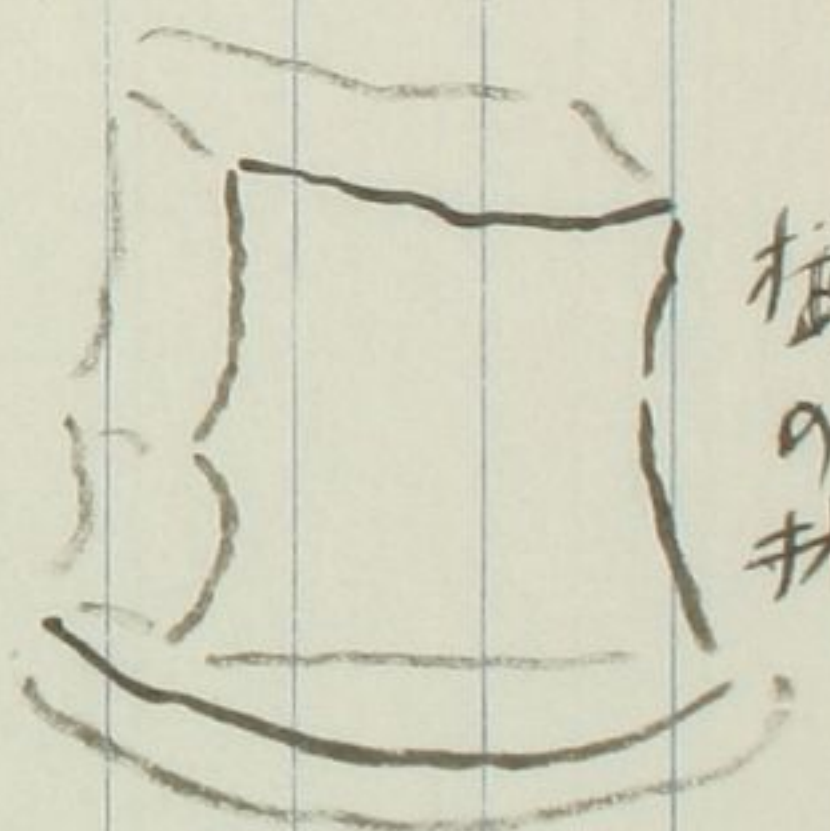
机を四列の
幅を恰も吉協等物四軸を監主とすべし

吉協等印を列を出し切ん
が二十餘等を剩すの(は)むを
得(る)は(未)と(る)なり、即ち(関)境
家(一)定(り)と(す)余(家)は(吉)協
の(恰)も(は)分(を)海(列)し(得)
ゆ(ん)色(を)キ(る)が、(ま)る(ま)る(と)も(海)列
し(る)光(景)を(と)ら(う)の(壯)
観(を)し(流)石(こ)の(え)り(原)を(元)
余(も)中(心)愉(快)の(跡)を(林)子(し)
得(る)なり

十日考ね記



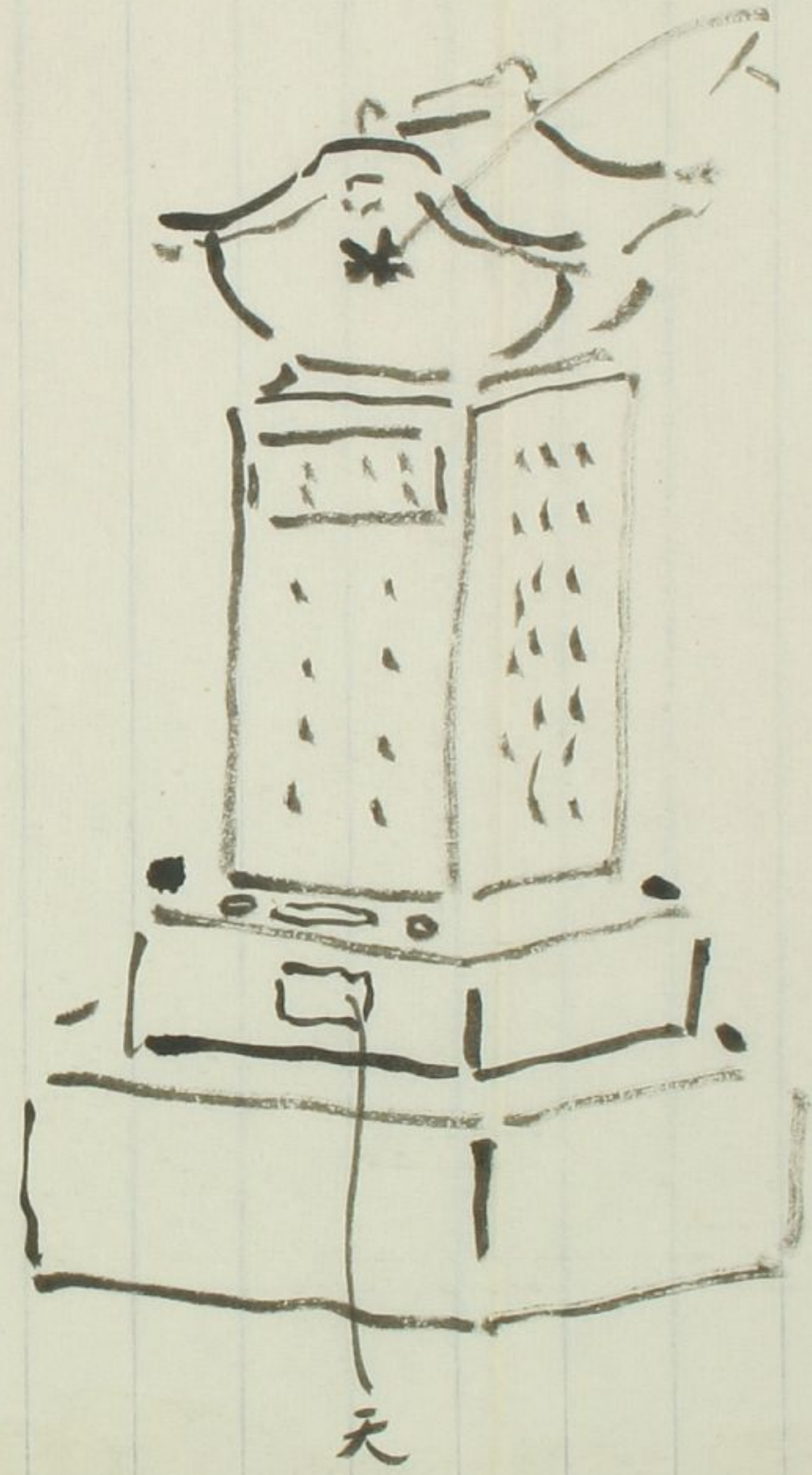
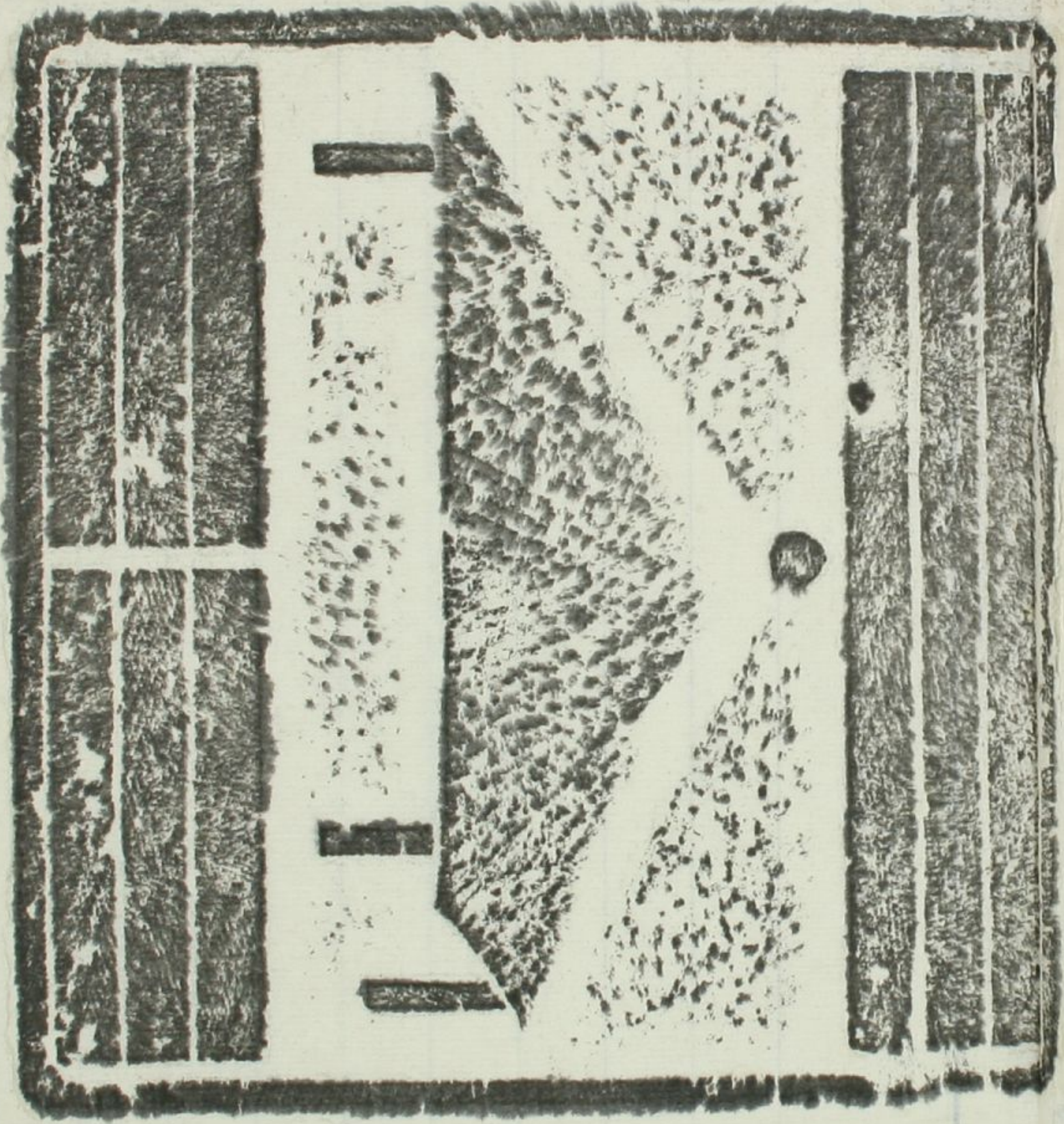
梅の鉢



○馬琴の印を刻したる後、彼等を馬琴の英年
洋文寺に老し其の墓碑銘と掲げしむ
梅の鉢本二通集了一本同本紙に花し馬琴の
け法に張るおのり、おの墓を左圖の如く

馬琴の墓

て西面におくもの法を刻し側面は傳
と刻し、おのり、おの墓を左圖の如く
く、おのり、おの墓を左圖の如く
高の乾坤一高人の彫刻を、おのり、おの墓を左圖の如く
印を掲げしむ、おの墓を左圖の如く
符節を、おのり、おの墓を左圖の如く
終るを又寺の、おのり、おの墓を左圖の如く
と、おのり、おの墓を左圖の如く
英年、おのり、おの墓を左圖の如く
馬琴の印、おのり、おの墓を左圖の如く
圖の如く、おのり、おの墓を左圖の如く



天

一 八犬伝芳流閣、條ハ三輯、四輯ニ跨ルル記事ニシテ
本館所蔵原稿本ハ四輯以下ニテ右箇條ハ
無之矣

一 八犬士姓名

犬江親兵工仁（子）

犬塚信乃成孝（子）

犬坂毛野胤智（子）

犬村大角禮儀（子）

犬山道節忠與（子）

犬川莊介義任（子）

犬飼現八信道（子）

犬田小文吾悌順（子）

入船九つとある一面の額也馬廻りの者毎に
掲げし者も一しとの傍に「芳風」の二字を
書き、流石を寄る印を捺するの一粒の
印ありし何人の者をも知りず或は何人の
者をも知りし何れも懐疑ししとあるは
かとうくうある一見の上記よりし十一月考
記

東本願寺

昔を言すたるは刻ししとあるは様
中心上段の日本外史の四字を刻しし
其尾より芳の字を削りたるの題次と
勸を削りし、之よりゆるとあるは例の條
らと削りし交け「勝言せし」を本邦
然るに「野々」の字を削りしとあるは前
ら此字を記せしあゆむを削りしとあるは
傍の「勝言せし」を削りしとあるは
其物を削りしとあるは「流石」の字を
印とあるは「流石」の字を削りしとある
物に「勝言せし」を削りしとあるは

く君の一つの疵あるに飲を過るるの
法を知らざることを是らうと或はれんん
れども這と余の地くさる所の一也。

と昔の或のつとをたゞくつとにましま
りつう向ひつとにままの日記とやしやん
びつとをたゞくつとをたゞくつとにま
まに人八をうくつとをたゞくつとにま
まをきくつとをたゞくつとにままに
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま

東海道

ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま

ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま
ままをたゞくつとをたゞくつとにまま

・桂候と其の和印とある見ら西海心

と笑ふをうら〜 羨妬あるは、校舎を詠
自今刀を是てふ〜と千ちう〜を接持
あはし支那人教育の詠をい〜をある
玄園に道下寧々又又えん〜

・ 伊藤母が〜 甚く清原書日 流此を
のあ〜 詠のお島を詠の〜のあ〜 詠も
言をう出〜 交わ商家の書此の
こも能〜 詠の物もをい〜を
偏〜の取〜の信〜をい〜を先つ
考〜の詠を〜の詠〜の詠〜の詠
ある自言詠〜の詠は言詠をを

東洋風

詠の〜 校舎を詠んことを詠ん〜 但
し詠〜の初〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
〜も校舎の〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
一変〜とある〜の詠〜の詠〜の詠
を詠〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
印利物と配布したる〜の詠〜の詠
ゆ〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
且〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
けり〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠
詠した〜の詠〜の詠〜の詠〜の詠

しなき命を授けし事なりや夫れ心き
るや其命をいふ井上侯の着る處をよ
さるるを淑者とし言ふ則ち其理の
鑑きしとあるまじし井上侯の初め
る所しる事也予のあふふ事初
を撰りておれ上京もえんハセと初
先し其けしと事ふ公又初め其上
分う後堂在佐幼に聞し懐況を掲
けしと事初し自家の心をも表わ
さんなり

・ある其命をいふと其まき其地あるなり

志あるも其のこのえとるなりとの難物
なりしなり〜自家の言張あるは其
其の法をいふ事なきと出ること倍
なり其も其の心と其んが心ひそ
るなりや其の心と其人〜そののえ
なりし事なき事なり其の心と其
く自分の由記と一平六万田約を
を公其の言はしき事なり其の心
早約地なり其事なり其の心と
其の心と其の心と其の心と其の
其の心と其の心と其の心と其の

若くは使済(なせ)う何んうをえら
んと、これと思のふもよき挨拶
りしとそよとそよとそよとそよと
とそよの思慮を細説し、そよと
物々私主とそよの仔細をあつらひ
を説き、あゆむきの説的をそよと校
書とあつらひ、あつらひとそよと
あつらひとそよとあつらひとそよと
あつらひとそよとあつらひとそよと
初野雨也 (十一日七草抄記)

○はつらひの若提すゝるそよとそよの二字款借
後と校と二字を刻しそよを入るそよとそよと
謹記 流記 の大印二款を刻す、そよとそよと
はつらひとそよとそよの字を伝ふそよとそよと
ことあつらひとそよとそよとそよとそよとそよと
そよとそよの布そよの初野とそよとそよとそよと
そよと、係しそよとそよとそよとそよとそよと
そよとそよと、或そよとそよとそよとそよとそよと
ひつらひとそよとそよとそよとそよとそよと
そよとそよとそよとそよとそよとそよとそよと
そよとそよとそよとそよとそよとそよとそよと
そよとそよとそよとそよとそよとそよとそよと

快戦の場と何事との関係あること終を著
んてゝるの似たり、馬場を此の臨終を著
るゝゝと忠告にんは、おの野路を著
ひるゝゝと七思ひるゝ、甚意多の似り
そゝおゝと思ひるゝ

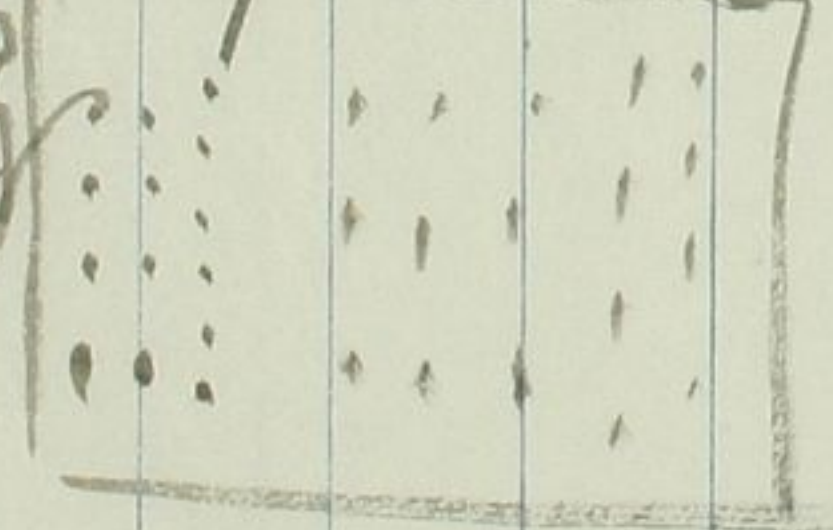
○この終局の会、響の危を打取の
おの由状を傳り受け出陣す、此の由を
横州の終局の會を著し、流き、終るゝゝ
凸記する文字を著るゝゝ、此の終局の二文字
四一、刻し、此の終局の會を著るゝゝ、
バ、此の終局の會を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ

東林院

うゝと、由状を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ、
よゝと、此の終局の會を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ、
此の終局の會を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ、
文字の終局の會を著るゝゝ、

華藏
夜演

華藏
夜演
夜演
華藏
夜演



○上月六七、ハ、此の終局の會を著るゝゝ、
此の終局の會を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ、
此の終局の會を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ、
此の終局の會を著るゝゝ、此の終局の會を著るゝゝ、

階下の一室に書翰を陳列したると、初めは勿
 天、殊に思入の文を多くし、二の目と云ふを并
 公衆の自由入稿をせしむるは早朝とて
 本館を二千人の衆とし、あつたを扱め
 ると、馬場等の遺書と早稲田のを中心と
 帝國天子・帝國回も銘おるを文を年々の
 花をを傳り集り法則に改むるも多く集
 まうといふは、日馬場等のの第一流と位
 多くと評死して、餘蘆を刺すといふの初
 とをいふこと

傳りまはつたといふ大品と

皇朝文獻

自筆の記 十数冊

贈答歴 一冊

帝國天子

漢文約論 以上

増補平妖傳 流傳文庫
の尾印を扱す

徳川黄表紙 十数冊

馬場等の高世作、書信用二分簿、
七紙のりあり

自筆の大徳行を

林徳一の心算を

自撰自集

以上 帝國回古録

終之
五朝水滸傳 收本 馬琴
口 流傳 言本 馬琴の評
右 馬琴の評
あり

醜新書

馬琴の自序
法味をあらたきもの
千秋香の序評

日本外史

馬琴の跋ありとの
里本安雑記を

耽奇漫録 二冊 馬琴の跋あり
之序あり



右 帝國の序

同上

一冊 十六冊ありとの
馬琴の跋ありとの

あゆみ先し印

兎の道中記

全訂

右川の蟹の序

右 柳の序

此の外書物類而後冊尺候内記
等を陳列す

書物類を全書の私蔵のよみ・みよえし
し印する位其の壯麗を人としし一書を
笑をしるすし其命恒右柳の書をも

己さくまらり親と志きらして誠實しとて
此部於るは他いし来りてしよのいしきき
あり

昔年より若き編 二巻

外 二巻

大概之なる

此部の方候とあるは

十巻

朝臣をえりし

まゝとありし

よの在るし

東林堂製

心唐典風澤古詞 一巻

外一 木村山評

元を而まきし心唐と云ふ

事考の風澤のジダラウラウラ

といひて其の意を古詞に

風澤の自中より得と云ふ

心唐の徳と云ふは

也

此の林君をいしは
徳をいしは

日言お状五月の句集一斗辨又との
作部より丈鯨八七一五分許物九丁五分許
唐紙五六十枚を換帳と認りてし
各用よりおの誦ありし巻尾に之録二斗
夏六おの取録ありし 併許養と之也

其計の當りてし家名の生年月の白紙に
其の改めしむるもその也(此の印字は十月
より記)

○十月より渡打花の事跡、近く審心獲たり
大振りの刻に二顆を出し示す花の取寄措
いず評しと余の架下第一とすう花六枚
月体前俯すう、淋れ、漢道や一刻する所の
印蛇二十枚あるを貯る。や、大西拜梅
小橋吹度片目高まの刻印ありと吹度
高まの花六の八拜梅を評入也拜梅
の印物に氣款あるをさるの、お付けし

東洋風

下谷伊藤紋に在りしと異つる 狎奴と根
き其の枝をさす、故に信の持を出し花
六の刻を物に持た流しと余ら之を訓
小余印と天下之英、可るると、善しぬ
最なる者、又文字に在り、書
文界の人呼ぶと天下之英と云ふ、酒
花の自他の筆のツリリと出志見す、鑄造
の徳を此にしもヤスリと用へる、さうく
雅致あるとさく、花の取寄るは、
利之字と信し、町も、金印十枚
を托る町に印号あり、町も、宛る

かゝるくくくく、あの人を殺すの意即中
山元守忠英の長を、位とし、失口
の故も甚だしくつとる事一殺母が
目撃の傍に、家人、命し、此
の言を二快と出し示さるるは忠英
の忠節の歌集を、一、夫木あ一と
は流題集倭歌集、ある方部の言を
細字の一冊の二冊の二冊の二冊の
冊に、夫木の園方、
文化六年に、睦月初三日、卒業
中川忠英、花押

東林製

又題林の奥より

文化二年乙丑首夏之末、勝言卒業

中川忠英、花押

花押

二冊の錦襦の表裏、快とつる、甚だしい
石に、主流する、余一見、驚く、
轉動へし、此の意、主あり、
子あり、保あり、夫を、
彼、言、
の、
(四十二年十一月、
)

燕村にも一面斯る周密な點がある。
 ▲仁齋の手紙は偶にあつても平凡なのが多
 いが、一つ天覧の榮を得たといふのが非常に
 善い。又茶山の手紙に尙々書に山陽の悪口
 の書いてあるのがある。他人に解らぬやう
 に難状といふ風に滑稽的に書いてある。
 ▲山内香雪(書家で米庵門人)の著はした名
 家書簡などが先づ手紙を輯めるもの、標準
 になつて居るが、其中にある松下見林と蒼
 生子との手紙の原本がある。名家書簡のは
 缺けてゐるがこれは完全なものである。又
 た伊藤仁齋の末子で紀州侯に仕へ書を書く
 した蘭嶋の書いた一丈許りの長い手紙があ
 る。此は彼の初江戸の時江戸の事情を報じ
 たもので其中に江戸の學者は服部南郭の外
 にたいしたものはないなどある。
 ▲白石の多い。其中にお家流の一通あ
 る。其頃公儀へ出す手紙は凡てお家流でな
 ければならなかつたのだ。之を見ると白石
 は立派に兩刀を使つた事がわかる。又退役
 後の手紙で祇南海、室鳩巢、雨森芳洲等を

集めて終日の歡を盡くし夜の白む時分に別
 れたといふ事を書いたのが一通ある。
 ▲祇南海の手紙は極少ない。私の所にある
 四通の中三通は殊によい。其一通に白石が
 邸を召上られて間もなく其邸が火災に罹つ
 た。鳩巢も其時同じ災を受けた。白石は邸
 を明けた跡で仕合せ、白石の後に這入る人
 も移轉前であつて幸だなどある。
 ▲山陽のは若い頃ので三通一巻になつたの
 がある。其中の一通が殊に面白い。其は段
 々喧しくなりかゝつた當時の時勢を論じた
 長い手紙で、其に、天下の病は療治する法
 もあるが自分の病を治するのは困難である
 といふ意味の詩が一首ある。
 ▲初戯作者の畑になると世間にはあり振れた
 のが多い。稍珍しいのは戀川春町(不埒)が
 蜀山人に與へた手紙が、丁度時期が梅雨で
 あつたから其に寄せて蜀山人の梅毒を諷し
 たもので、これは手紙が面白い許りて無く
 蜀山人の裏面が覗はれる。馬琴のでは面白
 いのは少ない。角兵衛獅子の考證付きの手
 紙で山東先生と宛名のある位なものだ。

▲近頃のものになつては清川八郎の手紙が
 三通、皆山岡鐵舟に與へたものである。清
 川八郎は若くて毒手に斃れた爲め餘り世間
 に現はれてはゐないが勤王の士として第一
 流に推すべきものだ。島津久光を説いて大
 念だが餘程權略に富んで成らなかつたのは殘
 鐵舟は彼の同志で三通共に皆其の間の消息
 を窺ふ事が出来る。又三通共に皆偽名が用
 ゐてある。女姓では近衛家の老女村岡の長
 い手紙が一通あつて珍らしい。此他實際の
 價値は充分あつても話をして見ると左程面
 白く無いものが澤山ある。

○十月二十一日の大阪毎日、雨科先生の生を
 一余のうしろを流るる水に載せしむる
 見る見いさふはあはれと即ち左の如し

手紙を習ふ事を奨励す

圖書館長 市 嶋 謙 吉

此一篇は同氏が商科々外講義として講演せられたる大要を筆記したるもの
 なり(記者)
 今日、諸君を一堂に會して御話をする問題は手紙に就てで
 ある、手紙を習ふ事を奨励すると云ふ方針を學校が執つたに
 つき特に諸君に一場の御話をする事になつたのである、手紙
 を習ふと云ふ事は今始めて學校が必要を感じた譯でない、此
 迄と雖も既に學科の中に加へてあり、相當の奨励をして居る

のである、しかし此迄の成績を見るにまだ不完全である様に思ふ所から、どうしても今一步進めて大いに奨励をせなければ諸君の前途に非常な差支を生ずると云ふ事を感した、そこで學校に於ては今後一層力を此點に注ぎ、諸君に充分の研究をさせる方針を取つたのであるが、今日はそれに關して聊か所見を陳述する積である。

手紙と云ふものは自分の情意を人に通ずる機關で多くの場合に於ては唯だ當坐の用を辨する道具に過ぎない、そこで一寸考へると雜作もないこの様に思ふ人もあらうが、實際はなかなか六かしいもので、昔から名高い學者でも文章はよく書くが手紙となると充分書けない人がいくらもある、日常の手紙ですら此如である、然るに手紙には色々の體があつて公文と私書の體が異なるは論を俟たず、公文に於ても私書に於ても場合に依り色々體を異にしなければならん、例へば拜賀の手紙、吊禮の手紙、時候と云ふ様に私書でも様々の書き方がある、公文となると愈々複雜で官等や位地に依ても昔しはそれ／＼體を異にし、儀式の場合などになると式の異なるに隨ひ手紙の様式もそれ／＼異なつた位のもので、實に複雜を極めた。そこでなか／＼銘々之れを心得て居ることか出来ないからおのづから、其専門家も出來、追々に何流など云ふて流派を生ずるに至つた位のものである、圖書館に藏してあるから御覽になるがよいが、足利時代にはその時代に定めた書札例があり、徳川時代には徳川時代の書札例があつて何れも大部のものである、足利時代は徳川時代と違つて所謂の戰國時代で兵馬倥傯の際でありたに拘らず今から見ると實に案外に

りたる觀察なり、交通の開けると共にいろいろ機關の便利も開けたに相違ないが、その結果として交はる人の數と其の度數もいたく殖え、且つ繁くなりたることを思はなければならん、昔し交通不便の世の中に十人の交友を有し一年二三度往復した人が、今日は三十人五十人の交友を有し、交通便利の結果月に日に頻繁なる往復をせられればならぬ事になつたのであるから、今日は却て昔しよりも手紙を書く度數の著しく増したるは言ふまでもなく、何れかと云へば今日こそ昔しよりも、手紙書く業も進まなければならぬ筈であるのに、事實之れに反するは主として今日の教育の結果に歸せざるを得ないと思ふ、言を換へて云へば、今日の學生の學ぶ所の課業はなか／＼の大負擔で到底手紙を習ふ餘力がない、言を換へて言へば手紙を構成する要件である所の書を習ひ文を學ぶ事に充分の餘暇が無いと云ふのが大原因であるに相違ない、勿論手紙は習熟を要するものであるから只書を善くし文を能くする丈にてもいかにないが、それにしても其基礎となるべき書一通り學び文一通り修めると云ふ事なくては手紙はよく書ける筈のものでない、而るに今日の教育の状態は前云ふ通りであるから概して拙であるのは決して無理は無い、これは學生の罪でなく、寧ろ罪を教育に歸するが當然であらふと思ふ。

思ふ程立派な書札例が出來て居つて、あらゆる式と體とか整ふて居る、必竟これも必要から生じたものであらう、徳川時代に於ても祐筆と云ふがあつて専門に手紙を書いた、區々の式や體で書いてならぬと云ふ所から、八ヶましい規定もあつたのであるが書も一樣でなければならぬと云ふのですべて公儀(官府)へ出す書面は御家流でなければならぬと云ふ事であつた、新井白石のときは云ふまでもなく能筆の人であつたが、唐様に書いては公儀で受付けないから、兩刀を使つて私書は唐様に書き公文は御家流に書いたこれは名高い話である、勿論今日は繁文を省くことを主として居る世の中であるから昔の様に複雜な式や體は要らぬに相違ないが、それにしても時と場合に依り形式を異にせざるを得ないことはいくらもある、一通りそれを心得る丈でも容易でない、であるから手紙を目して一概に無雜作に書けるもの思ふのは大いなる心得違である。

昔しは手紙を書く事が社會教育の大切な課目であつた、隨つて若年のものも一ト通り體を備へ式に適つた手紙を書いたものであるが、今日はドウカと云ふと人文の大いに開けた割合に手紙を書く業は少しも進まない、否な非常の退歩を見るに至つた、其原因に就きある人の云ふには昔しは交通不便であつたから通信は一に文筆に依らざるを得ない、隨て手紙書く業も勢ひ發達せざるを得なんだが今日の如く交通自在で電話あり電信あり電車あり鐵道ある世の中となりては、手紙の勵く區域は非常に狭まり、大抵は端書で用か辨じ得らるゝから手紙書く業の拙なくなれるも道理なりと、しかしこれは誤

書くはまだしもの事、「親展」と書くは封書に限ること言ふまでもなきに、やゝともすれば端書の表面にも之を書き「貴酬」などは返事の事であるのに、取り違へて返書でない手紙に用ゆるなど滑稽を極むる例は殆んど枚擧に暇無い位である、文體に至つては愈々ますますで、今日程手紙の體の混亂した事は幾んど前例が無いと云ふてもよい位である、爰に又近頃自然主義と云ふものが行はれて來て、何んでも自然に適ひさへすればよいと云ふ様な説か世の中に行はれ來り、手紙の體の如きも之れか爲め幾許影響を受け追々放縱に流るゝ傾がある、此主義は手紙を書くことを知らぬもの若くは不得手な人に取つて非常に都合のよい主義である、と云ふ其譯は自分の考其儘を平常の言葉で書きあらはすことは誰れしも出来ることであつて、體も式も構はないのが寧ろ自然であると云ふので、こゝに公然「ジャステヒケーション」を得たのであるから、これは拙を蔽ふの好武器は無い、これほど歓迎を多數に受ける主義は無いが、其實これなど手紙に害を與ふるものは無い、吾輩は手紙の大敵は自然主義であると云ふことを斷言して憚らない。

全體言文一致體の文章は雜作もなく書ける様に思ふ人もある様であるが、其實なか／＼六しいものである、成るなど俗語を用ひて書くには相違ないが、之れを文章とするには相當の工風を要する、明快に簡潔に書かんとするには、能文の士と雖も難しとする所である、殊に手紙のごとき長文を忌むものに於ては一層困難である、たゞし私は必ずしも言文一致體の手紙を不可とするもので無い、簡潔にうまく書ければ此體で

も不可とは言はぬが、自然主義を土臺として書くことになる
と到底カタの附かぬことになる、と云ふのは此主義を極端に
解するときは文章を自然で無い隨て文章らしき言葉
や言ひ廻はしは絶対に避け、ダラ／＼しても普通用ゆる言葉
の儘書きつらぬるが自然に適ふと云ふ理窟になるから、此主
義か手紙の上に行はれる日には丁度自分の話の速記録を相手
に送ると同じ事になり、今の繁劇なる世の中に適しないとは
論する迄もない、一體手紙のとき者は相手を見なければな
らぬものである、自分の流儀だからと云ふて相手構はずに自
分勝手遣る譯にはゆかぬ、差當り諸君は學校を出てから自
から商店を構へ獨立の業を営む人もあらう、又他人の店舗に
傭はるゝ人もあらう、其の何れにしても取引先が依然舊來の
手紙の式を守つて居るのに、自分流儀で自然主義の手紙を書
く譯にはゆくまい、人に傭るゝ場合に於ても恐らく個様の手
紙を書く人などは先方で眞平御免と斷はるは知れ切つた事
である、要するに自然主義の手紙の上に行はれることは今日既
大に墜落して居る手紙を一層放縱蕪雜に導き、世間と益々遠
さからしむるものと謂はなければならぬ、私が此主義を目し
て手紙の大敵と云ふは此の故である。

前言は今日の趨向を云ふたので諸君が其弊に陥つて居ると云
ふた譯ではない、併し忌憚なく云へば諸君は手紙書く業は他
の智識に比して劣つて居ると謂はなければならぬ、世間でも
此點に於て信用を措て居らぬ、現に毎年の卒業生を吾れ／＼
か世話をする場合に銀行會社等より先づ第一に來るは其人物
は手紙か書けますかと云ふ質問である、全體何處の商店でも

會社でも諸君の學問上の經歷は問はずと知つて居るのであつ
て、相當の學力を有して居る事は先方に於て問ふ必要がな
い、所て手紙の事を先以て問ふと云ふ譯は如何にと云ふに少
くとも先方に於て其點が不安であるからである、此點に於て
今日の學生は世間から信用を置かれて居らぬので、それも其
等商店や會社に人を使ふに毎日させる事務と云ふものは第一
手紙を書く事である、事務の九分九厘は手紙を書く事にある
ことと云ふてもよいのであるから、傭主が人を用ゐるに當つ
て先づ手紙の巧拙を問ふのは決して無理ならぬ事と思はれ
る、所て吾れ／＼は斯る質問に對し毎々困却をする、勿論中
には相當に書く人もあるには相違ないが之れは極めて小數で
あつて多數は遺憾ながら充分でないから、斯る質問に對して
まさか達者に立派に書けるとも答へられず、斯る事からし
て折角學業に缺點の無い立派な人々を世話を仕損ふことが屢
々ある、諸君が折角苦辛を積むて學業を修め、いざ彼岸に達
せむとする場合に臨み只手紙の下手なる一事で（諸君から考
へて見ればさまで重大な事とは思はれないのであるが）功を
一簣に欠くと云ふ事になるのはいかにも残念の事である、今
日態々諸君を會して斯かる事を云ふのも畢竟諸君が他の諸學
科に於て立派に成績を擧げて居りながら、此の一事で功を缺
くのは如何にも残念であるから、諸君の力を充分發揮させる
には決して手紙を軽く考へてはならぬと云ふ事を、深く頭腦
に印したいと云ふ考に外ならぬのである。

事を明快に書いて意が達すれば先づ是れでよいのである、と
云へば何でもない様であるが事務的の手紙と云ふた所で種々
の式形がある即通知状とか依頼状とか禮状とか照會状とか、
おのづからそれ／＼の場合に對する書式が定まつて居るが、
此形式に通ずるには多少の習練を要する、又式に拘らず事務
的に意の達するまでに書くにも相當の習熟を要する、併し以
上は事務に立さりわと直ちに必要を感じる極めて低度の手紙
であるが、今少し高い程度を云へば手紙は決して辭達すれば
止むと云ふばかりでない、只用が便すればよい、如何に乾燥
無味でも意が明らかであればよいと云ふものでない、少しく
複雑の事になつて多少相手と難事件を交渉する時には無論幾
何の掛引がなくはならず、又随分多くの場合に於て情に訴
へねばならぬ事がある、斯様の場合には略もなければならず
理もなければならず情もなければならぬのであつて大分複雑
になつて來る、すると自然手紙が文學的になつて來なければ
ならず、問題の性質がデリケートであると理詰にも行かず略
でも行かないことになる、個様の時にはどうしても情に訴へ
る外は無い、理窟で解けない難澁の事件が情で解ける場合が
少なくない、斯る場合に用ゆる手紙は少なくとも人を動かす
力がなくてはならぬが、人を動かすの文章は幾許か文學的な
らざるを得ない、そうなると話が少しく高尚になるけれども
俗務に於ても此處までは是非行かねばならぬ、故に手紙は唯
た用を辨すれば足る、意達すれば止むと思ふは誤りで、高等
の手紙になると決して單純のものでなく、多くの習熟と永き
研究を積まなければならぬ／＼そこへ達せぬものである、併し

前にも云ふ通り差當りは決して六ヶしい程の者でない、唯た
並外れに立身せんとするにはどうしても六ヶしい局面に當ら
ざるを得ず、六ヶしき局面に當るには高等の複雑なる手紙を
書くことの必要が起る、爰に適當なる實例がある、名はしばら
く預るが、諸君の先輩である校友が手紙で身を起したと云ふ
實例がある（今日或る方面の商業界に大立物となつて居るの
である）、が其人が私に會て經歷を語つた事がある、其人の云
ふには自分の出世は全く手紙が基となりて居る様に思ふ、最
初自分が使はれた人は非常の繁劇な人であつて手紙を書く暇
がないから自分は其れに代つて始終書かされた、忙はしい人
であるから、いつも委しい事は云はない只誰々に何々の事を
云ふて呉れと一口二た口云ふ位なものである、此片語隻言
を勿々に聞いてかくのであるが、それが中々重大な事柄であ
つたり複雑な事であつたりする、それを相手に向ひ本人の意
のある所を充分徹する様に書くには随分骨が折れた、而し段
々と馴れるに従て主人の意をよく飲み込む様になり、其片言
隻語を聞いて其意味する事の何であるかの理解が明らかにな
く様になり、十中八九は主人の意中を寸分の違ひなく先方に
通ずるに至つた、場合に依つては主人の考へ至らざる所まで
布衍して書く程までになり、遂に非常な難事件の起つた時に
自分か刻苦して書いた一本の手紙で甘く解決を告げたことも
一兩度あるに至つたので、主人も深く自分を徳とし、用ゆる
に足るの人間であると感したと見へ終に大事を任かざる、事
になり、之れが今の立身の基となつたと云ふて居る、これは
餘程諸君の参考となるべき事實である、總じて人に使はれて

其の才幹を認めら、は手紙から来るのが確かに多い、人の秘書となり記室となつた人が往々一躍して顯要の位置に進む例は珍らしくないが、段々調べて見ると手紙が起身の基をなし居る場合が多い様である、諸君の如きも當校を出る曉には前に擧げた先輩校友と同じ道行を踏まなければならぬ、學校に在りて筆に親むだに因み世の中に出て筆に關係ある事務に取りつかねばならぬが、それは即ち手紙であつて諸君の才幹を試めざるゝはこれにあるのだ、諸君の早く身を起すも長く埋もるゝもこれか巧拙にあるから、どうしても手紙に對して粗略の考を持つてはならぬ、經濟學の原理や國際法の規則などを實地に適用するは一年に一遍もあるかなしだが手紙は毎日書かねばならず、諸君の才の利鈍もこれに依つて時々効々に判せらるゝとすれば、諸君の斯道に勤勉を要するは云ふまでもなからう。

扱て一步を進めて手紙の内容の事に移るが内容即書き様に就ては爰に多く語る時間がないから、尤も書きにくい手紙を八つほど擧げて見よう私は名づけて書簡の八難と云ふて居る。
第一難、すべて目下にやる手紙は難いものである、目下に對するのであるから普通用ふる敬語を省かなければならぬ、而るに敬語を省く結果は高慢らしく聞へる、之れを高慢らしく聞へす威ありて猛からず、温情の何となく存して居る様に書くのは困難な事で初心の者は甚だ難しとする處のものである、私のこれ迄知る所ではかゝる手紙を能く書く人は太政大臣までにもなられた故三條公である、公は位人臣を極めたから何人も云は、目下である、而るに謙徳の人であつたから教

ならぬ、そうなるを受取つた人も多少の感興を起すのである、斯かる事に情味を點するは中々難い、之れを巧に故らでなく素直に自然に書くこと云ふ事はなかく困難である、第三難はこれである。

第四難、婦人にやる手紙は相手は相手がけに無論假名で書かねばならぬ不便がある、其上難かしい事柄を分る様に書かねばならぬ困難もある、普通用ふる漢語を交えた手紙は容易であるが此柔らげに手紙は難かしい、一步進て婦人の情を動かす程にかくには勿論文學的の趣詞を要するので一増難かしい、これは誰れも感ずる困難である、自分の細君や姉妹などの内方人に遣はすのは論外として他人の婦人に手紙をやるには誰しも困難を感せぬものはあるまい、此種の手紙を書くに巧なるものは所謂國學者を推さざるを得ずだ、私か藏して居る加茂真淵か自分の門人なる倭文子と云ふ妙齡の女子に初旅に出る時にやつた手紙の如き實に其標本ともなるべき者で徹頭徹尾假名で書いてあるが、如何にも情愛紙幅に溢れ嚙むてふくめる様に物教しえして居る所は慈母が愛嬢に對することき趣があつて讀者を動かすの力がある、此の手紙は何時か諸君にお目にかけるつもり、これか第四難である。

第五難、借金の云ひ譯をする手紙を書く困難並ひに金の無心を云ふ手紙の困難なる事は多言を要さぬ、此類の手紙は尤も人の情に訴へねばならぬもので、如何なる筆無精の人でも之れには大に刻苦する、私か常に云ふ事であるが平常手紙を書く場合に此時の心持を以てすればいかなる手紙も必ず立派に出来るに相違ないと、此種の手紙には情は勿論理も場合に

語を用ゐずして而かも傲らない様にうまく手紙を書かれた、細川潤二郎君なども其方に妙を得て居らるゝ、第一難とする處はこれである。

第二難、慶弔の儀式張つた手紙は誰れでも一通り書くものである、而し只式一片のものとすれば誰れでも書けるものであるが、其間に自然愛情の寓してある書方を要する事は困難の事で大家と雖も尙之れには辟易する場合が多い、斯かる手紙は餘り淡泊に書けば形式一片に流れて電信で吊ひ慶すると同じ事になる、さればと云ふて表情の辨を種々陳列すると不自然になつて何となく故らしくなつて嫌味が出て来る、よく其中庸を得て其人の真情を表すは餘程難事である、曾て下田歌子女史がある人の訃報に接し悔状を送つた、之れは情意並ひ至つた懇切なもので愁傷の情よく現れ、形式に陥らず頗名文であつたが最後に至て「只遺憾な事に御生前一度も御目に掛からなかつた」と云ふ様な事が附加してある、一寸聞けば滑稽の話にも聞こえるが、自分の知らない人に對して悔を云ふ手紙にかく人を感動せしめる語を用ゐたのは確かに名手たるを失はぬと云ふてよろしい、第二難はこれである。

第三難、譬へは寒暑の見舞狀の如き特別の用あるものでなく、只左右を伺ふと云ふ様な手紙は難作もなき様で困難である、斯かる手紙は御無沙汰であるが相變らず御壯健ですかと、かう云ふ丈では情味索然として相手に何等の感動をも引起さしめない、其手紙には自分の近來の狀態とか隔絶したる土地ならば双方の氣候の比較をするとか或は最近に見聞した珍事を巧に點綴するとかの手段を以つて情味を加へなければ

依つては略も兼備せねばならぬ時が多い、恐らく諸君も此種の手紙には多少の經驗をもつて居らるるだらう。

第六難、人に代りて書簡を書くの困難なる事、全體自分の情を其儘寫して遺憾無くするにすら相當に困難である、況や自分ならざる人の情を寫さむとするのであるから困難は知れ切つて居る、如何に名文で書いても代筆と云ふものは情のうつらないもので、曲りなりにも自分の書いたのは情のうつり易いものである、故に交際社會の禮式に於ても代筆は禁物となつて居つて無禮と云はれて居る、自分が病氣なぞで萬止むを得ざる時の外は代筆を使はないが通規となつて居る、畢竟本人の情がうつらないと云ふあたりよりかゝる式も生れたのであらう、先刻お話しした先輩校友か主人の代筆をして地位を得たと云ふが如きは此困難に打勝つた例の一である。

第七難、長上を諫めるとか若しくは目上の人に金の催促をする書簡は書き悪い者である、此類の手紙には義理を明かにすると同時に敬意を失はない様にせねばならぬ、此場合には尤辭令を巧にせねばならぬ、いかに云ふ事がよくとも辭令行届かずして荒立つ事ありては直に感情を害つて其の云ふ趣意をとつて呉れぬ事になる、目上の人に金の督促をする等の事も全し事である、借したる金を取るのであるから返せと云へばよいのであるけれどもさうは行かぬ、いくらか敬意を拂はねば禮式として濟まず、去りとして餘り敬意を拂ひ過ぎると先方で返しても返さなくともよいと云ふ、心持を起さぬにも限らないから其邊の調子をよく考へなければならぬ、怒らさず返さなければならぬ様に仕組むのは全く文章の働きである、嘗

て加藤技直が其師真淵の子息に與へて借金の督促をした手紙を見た事がある、それは先づ先大人真淵に對しては子弟の關係があるから斯く々々の特別の事をしたのであると云ふ事を書き、所で代か交つたから事情か全しからぬと云ふ事を條理を分明にあらはし然る上にて督促に及ぶと云ふ順序で條理と温情を並び備へて書いてある故に相手か如何にするくとも傾かねばならぬのである、斯様の手紙は相手方と場合とを考へ工夫せねばならぬ故に書き悪いものである。

第八難、他見を憚る手紙には大抵御覽後火中と終りに認めであるが例である、所か事實に於て火中に附されぬ事が多い、故に早晩世に出て来る恐れがあるから用心を要する、かゝる手紙にはなる丈相手にのみ分る様な書方を選ばねばならぬが、相手にのみ分る様に書くといふと兎もすると相手にも分らない事になり易いから困難である、さて又他見を憚る手紙には密書の性質として他人の褒貶毀譽に亘る事も或は籌略などに關する事もある、斯かる事柄は筆の使ひ具合によりては人をも毀け自分の人格をも下げる様な事のあるもので非常に斟酌を要する、匿名にしても筆蹟で本人の知れるものである、而して筆蹟をかくす事に就いて私の感したる事か一つある、全體どうしても自分の筆は隠し切れぬものあるけれども只一つの手段は片假名にて書く事である、手紙の全文を電信の如く片假名でかくのである、之れは一寸知れないものである、要なき事であるけれども序であるから爰に述べておく、これが第八難である。

手紙の困難は此八難だけには限らない、只自分は諸君の頭

家となるには東西いづれにても全様に書をよくせなければならぬ事は今の一例でも分るであらう。最後に尙一事の漏らす可らざる事かあり、それは手紙を習ふを勉めるでなく楽しんで貰ひたいと云ふ事である、即ち手紙の趣味を感じて欲しいと云ふのが私の切なる望望である、すべて物は勉むるばかりで上達するものでない、昔しから好きこそ物の上手と云ふ諺もあつて趣味を感じる所から自づから其道に進歩發達も来るものある、然らば手紙の趣味とはどつ云ふことを云ふかと云ふに、筆者の面目が赤裸かにははるゝと云ふか如きは手紙に趣味の存する一例である、人の樂屋は全く手紙に依つて窺はるゝものであつて、歴史家などはこれにより其人の表面を考へ色々の秘密を發見し意外の事實を掘り出すこともあるが、これは全く手紙の徳と云ふべきである、眞面目に書いた額面や掛幅などは、立派は立派に相違ないが、所謂社祿つきで裝飾がしてあるから、其人の眞面が知れかぬる、刻苦して書いた文章なども矢張り其通であつて、其人のあぐらをかひて居る有様やせき拂をして居る様子まで躍如としてあらはして居るものは、全く手紙のことに眞率に裝飾なく書いたもので無くては窺ふことが出来ないのである、どんな人にも趣味を感じしむる手紙は繪を交えて旅行の有様などを書き、即吟の詩だの歌だの俳諧だのを巧みに點綴したもの、若しくは滑稽を極めて人の頤を解くなぞの手紙であらうが、名手の書いた手紙になると繪かなくとも詩歌俳諧などか交じて居らなくとも成る程と興味を感じしむるものかいくらもある、私は此の趣味を貧乏趣味と名づけて

に手紙は軽々にすべきない無難作に書けるものでないと觀念を與へればよいのであるから、此れより以上並べ立つる必要はないと思ふ。

終りに臨むで一二附け加へておくべき事がある、それは別事でない、手紙の巧拙に大關係を有する書である、書か拙でありては文章の味を少くとも半分位は没却する、手紙の味もこれかために大部分失せて仕舞ふ、去れば手紙を習はんとすれば是非同時に書を習はざるを得ない、或は文字は記號であるから書などはどうでもよいと云ふ論もあるが、これは實地に適はない論であつて書か拙なれば手紙を受取る人に不愉快の念を與へる、第一明確と讀めない不便もあり神速に讀めない不便もある、又或場合に於て人より人品を低く見らるゝ不利益もある、手紙に附随して書を學ぶの必要なるは云ふまでもないが、兎もすれば西洋などの事を楯に取り、日本に於てこそ一種の文字あり書法などを八ヶましく云ふけれども西洋にはそんな事は構はぬと云ふ負け惜しみを云ふ人もあるが、西洋でも日本と決して違は無い、彼の「クラーク」なるものを見よ、其の筆蹟は實に見とれるほど見事のもので「クラーク」の資格で尤も重きを置くのが書であるから随つて書を學ぶに力を盡すことも非常のものである、此の「クラーク」は事務上の大機關であつて、之れに對する報酬のごとき書の巧拙に依つて著しい相違のあることは誰れも知つて居る事實である、西洋既に然り況や日本の如き古來法書を研究し來り書の巧拙によつて人物までも見ると云ふ習慣のある所に於ては書はどうでもよいと云ふは極めて粗漏な考で間違つて居る、事務

居る、つまり反故のごとき廢物同様のものに對して持つ趣味であるから貧乏趣味と云ふのであるが、此の貧乏趣味はなか／＼金屋玉堂に居る王侯貴人が知らない佳味を有して居る、丁度鯛やサマの如き廉價の魚に却て溜らない味があると同である、又鹽などの精選したのになると淡泊に過ぎて却つてニガリの残つて居る半製の鹽に味を譲ると同じく、又園藝家の誇りて居る上等の果物は案外味よろしからず却つて野生の果物がうまいと同じ様の理窟で、手紙のごとき反故同様のものに、却つて一幅幾百圓の價する書畫よりも遙かに味の富むで居るものかいくらもある、實は趣味の内にこれほど廉なものはない、又道樂としても之れほど弊の伴はない道樂はないのである、私か諸君にすゝむるに此の趣味を以てするのは此故である、但し古人の手紙なぞを集めたり翫むたりするのは較々骨董道樂に陥ることになるが、私の諸君にすゝめるのは日常諸君相互に往復する場合に自からも趣味を以つて書き又人の趣味を以つて迎へ味はへと云ふのであつて必ずしも古人の手紙を翫べと云ふのでは無い、諸君は今日既に繪はかきの遣り取りに於て幾分の趣味を感じて居らるゝであらうが、つまりそれと同じ事である、手紙の場合に於ては文章が長い丈それ丈趣味も深い道理である、或は手紙には繪の如き目を怡はしむるものが無いから、趣味は感じ難いと云ふ人もあるか知らんが、用紙や封筒にもいろ／＼意匠の籠つて居るものがあるから、それを用ゆれば同じ事になる、又た繪はなくとも文章丈にて充分趣味の感せらるゝものである、一體趣味は極めて廣汎のもので、某種の手紙に限つてあるなぞ云

ふ條子左のぬくあし

十月廿日

いづつゝる松み市橋氏の門生書畫帖
なるもあな二枚とあるも前はおもしろし
早速押漑しちり笑てんといふ氏を
痛と苦いと編み合ふ三橋のたつとを
別ち讀めよ定まらざるも拙くも
拙めと拙也

のそむか共弁しと然く供とて山も古
岡のそむか共弁しと然く供とて山も古

みばふ人へ無んといふに岡のそむか
首のそむか共弁しと然く供とて山も古
前をいへるといふはたし
後をいへるといふはたし
やうと報しといふはたし
あしといふはたし
まをいへるといふはたし
あつといふはたし
は河橋といふはたし
あつといふはたし
まをいへるといふはたし
あつといふはたし

成るは使まおだりしたあ時少使まを
不只今又お使、大才時、の命を来まじ
このまゝとあつては只お返し七か何
頼の妹、妹、文、まゝとるて、か同、
うのま、若、あ、洞、見、不、山、陽、備、中、
帰、汝、の、う、即、の、者、と、見、四、か、野、叔、姪、ま、は
備、中、成、口、郡、小、野、市、現存の先代を丁し山島
は、か、子、も、く、匠、留、せ、し、ま、え、彼、か、み、は、多、く、の
筆、清、あ、り、し、多、分、敷、込、せ、う、と、の、い、に、同、け、
即、夫、あ、り、し、と、あ、り、て、又、し、り、し、う、く、さ、し、極、

東林院

晩年あし、あ、こ、む、極、珍、ま、の、ま、物、と、る、
カ、ま、ま、は、難、あ、り、共、は、け、し、白、く、る、ま、
る、よ、く、く、く、り、覚、く、く、く、他、(慶
く、せ、う、の、の、怪、く、く、て、又、く、煩、悩、の、た、り
し、み、く、句、あ、せ、し、あ、り、白、く、カ、ら、ぬ、こ、
更、の、ら、子、許、こ、置、ば、あ、り、は、出、ま、あ、り、
と、こ、や、り、の、り、
十、字、
申、く、

ね、直、半、老、先

五

多く人を招き居るべき事ありては、
惟の、彼の、彼、瀾の、後、本、谷、起、主、の、主、意、
を、異、う、す、故、に、收、存、の、厚、き、を、謀、る、事、あり、
瀾、境、の、善、き、を、及、び、て、る、亦、其、の、勢、勢、歟、
今、日、以、來、の、没、る、事、を、後、の、地、を、上、下、遊、樂、
の、公、事、と、す、定、め、の、公、開、善、美、の、精、作、創、主、の、
初、め、の、之、を、志、め、の、べ、し、多、く、人、を、招、き、を、居、
く、事、を、示、す、の、希、望、も、是、も、も、庶、幾、う、ん、と、
す、湖、く、う、め、ん、は、東、東、市、人、に、此、彼、の、没、る、
と、嘆、夫、と、し、府、下、或、所、に、文、庫、を、増、設、し、ん、
と、す、と、鳴、呼、是、ん、あ、る、死、夫、の、教、化、の、洲、

東、東、市、

海をかく文庫の海濱と云く事ありては、
我りて國を治る人をして、海く見、施設、二期、
待、る、事、也、請、ふ、勉、め、之、を、成、や、謹、々、を、祝、す、
の、日、甲、子、年、十、月、十、日、

日本國ち後援会

市鳴海主

○前、の、揚、子、を、大、海、傍、に、人、の、親、戚、中、川、忠、美、
と、ま、の、人、の、傳、を、神、心、に、記、す、
江、戸、の、人、字、士、確、強、強、を、元、海、寺、
と、稱、す、事、希、有、る、也、の、船、来、去、の、法、也、

紀伊御系譜略、攝政年表、椒庭記が
の著者ありと、後行を他所胸完攻の
位す

と云ふ説をえると中川七千九の旗をひるい
ことかゆんた、馬廻りも世々々々人々知ると
懐年一億七の後世の攝政の位をひるい
みろつたしのかあ〜、何ん中川と云ふ位
来もあつたことかあ〜、か〜ん(と)録を其
の傳と云ふ傳い〜、日記を讀むとえん
み〜、其のちの湯也〜、いんか〜、あ〜、
の日本國志録、取合大会に合ふ、後え〜、

東
洋
書
院

と云ふら〜、いんか〜、いんか〜、いんか〜、
表方のいんか〜、いんか〜、いんか〜、



結盒石縁

日本圖書協會擬斷鑑
藏六濱邨家



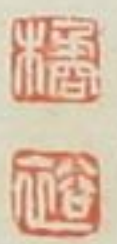
東林風琴



結盒石縁

戊申嘉平擬古泉

藏六齋



一月二十一日(壬午)漢方刻しなつて改刻
をゆきし

○前島文のりる白紙合を記さんそ余之初
とまひ此の年春迄中、とやとふ西行八(言
吐子孫(也)を流る白紙合の事を云々し
母果て、収各取揚と云我中のあまゆを
一説するを得たり、此揚を可憐の子女の
あふ所を養ふ所の子孫とて其致を異に
する可く興味もあらし可憐の子女と稱し
舞うる舞の情は揚と云一なるは、うらむ各
あまゆを回さるるまゆ、うらむ流を伝や
りし、吐生のうらむ、あま、都個のあま
ゆ、あまゆをんじり、揚を、室母、里校

あまのさへをうとわ北人とは先以早稲のく倍し
くもつて居る居る人々のまう親しくと成る
能く故の馬の移るに日頃と云うても此の
理をうと思はんといし(明治四十年十月十九
日記)

○刊行会が一切掉尾の事業を九の院
又の刊行を減らすかといふことありて國難を
感ししを合部譯文のありて勿論俗字
他のところへ校訂の國難を告げしを
わきまをいひたる地名人名の類を
國難用のまゝといふことくまなく毎頁十

東京
出版

数の二をを彫刻をせんはつとぬと云ふは未
も二三巻の内一巻を漸く流の上揮うと
なすがせる頁を組らざる約五ヶ月を費し
しといふ二巻三巻を一冊に國難を告
ぐるも、さうを刊行会が事業の難
かると之を刻本とすといふとき余の既記
を考ししこと一方をいふに左の如く
言を物の中を好むに情を成るなり
言を好むこと一巻をいふに思ひす
地獄未の
此会よりいふに
志

明治四十年十月十九日 志

刊高麗史

例言

二行分

朝鮮與我國相距葦航交通往來關繫最古近時置統
 監府以降文獻風俗須檢討者益衆且急矣但其
 史乘載籍流傳甚乏上世姑置之中世亦僅屈指
 殆無足徵獨其高麗史詳叙王氏三十二世五百
 年間事稱為體裁尤備焉今本會取而與我國書
 竝為印行亦非無微意竊存平其附者也

一高麗史之作高麗世宗朝女史鄭麟趾等三十二
 人奉命所撰按麟趾字伯睢號學易齋河東人太
 宗十四年文科第一人累官至領議政卒謚文成

例言

高麗史

所著本史外有七政內篇歷代兵要絲綸全集亦
 皆奉命纂述又有學易齋全集若干卷

一初高麗太祖命儒臣倣涑水通鑑用編年體撰高
 麗史三十七卷然有闕遺未備者焉太宗時命俾
 訂修亦未見完成而止至世宗麟趾等奉命撰著
 更倣龍門史記用紀傳體至文宗元年告成其書
 為卷一百三十有七別有目錄二卷按文宗元年
 即明景泰二年而我後花園天皇寶德三年距神
 武天皇即位二千百十一年矣

一高麗史印本有七十冊者有八十冊者而其實所

載則無異也。今縮印之便，分為三冊。世家四十六卷，叙于上冊；志三十卷，表二卷，叙于中冊；列傳五十卷，叙于下冊。而目錄二卷，原本總而載于世家之前，今分而載于每冊之首，且其下各注紙次，以便檢索。

朝鮮印本文字，視之我國現在印本，如形之為形，暴之為暴，巡永美遞之為巡永美，迤再屆跡藝之為再屆跡藝，異體甚衆，校讐既已用力，閱讀又應勞心。今除地名、人名、官名等外，改用我通行文字。地名、人名、官名等文字，雖用異體，自後而變之，亦

例

以

原

非所以傳真也。故今務從原本，不敢改易其字。無有於我國者，特雕造木版以補之。闕大抵一葉多者，至數十字，少亦不下三五字，讀者諒之。

一原本魯魚亥豕，轉訛甚衆，憾其書本稀於世，無由更獲善本。數部一校，勘今其尤甚者，即如錐林為錐林，辛丑為文丑，或如元作兀，囚作內，則斷然是正。

一原本文字蝕滅，不可讀者，則今用口為識，姑闕疑字句間，明有脫漏不容疑者，則為補之，亦用「」為識。

一此書印本於韓國既已罕覩矣我邦藏書家僅有
二三部耳本會幸而購獲山口縣人近藤清石氏
所藏此係毛利侯舊物所謂大内本之一云

○一此年西京の三浦氏ありて囑し給ふ印
ニ類涉く成り此者多しとある古書等あり
の圓あり楕圓の印ありとある約二寸許
謀、傑心也といふは乃の印高伏え其の
多しと木米りんの印を換てしをなすも也
大体の結搦と米ありの印と似たり唯米
ありの印より祥瑞と似たりと似たりと
ありありありと似たりと似たりと似たり
ありと米ありと祥瑞の名ありと似たり
ありと似たりと似たりと似たりと似たり
ありと似たりと似たりと似たりと似たり

種くまきし 祥瑞とせしむる花はあ
画のしるしと作りし

とありしものも今見えんも長し 紐と祥
瑞云々の語ありとせしむる物りしもの
也、ゆゑのちる年一山ありと二顆もありし
上出来しと流るる年と成候と一石
つと物りし

生不乳萬に候 長羊大星一扁舟
我種六是所名る 笑殺前灘双

白崎

乍白旗の節下り家執行物と云ふ

東林堂製

帰一と事不考 修徳具又言云ふ

之巻

日本のあり(十一月廿二日)と流るる(圓寺)
御恨念すを今とらめく 新のくさるあきる南
花よりまをす 新のくさるあきる南
吾我種(圓寺)と見ゆると人字の
の取向し(初日の式体と南は又文を)
を以て元とす(吾我種)と見ゆると人字の
の御恨念す(圓寺)と見ゆると人字の
あきる(圓寺)と見ゆると人字の
あきる(圓寺)と見ゆると人字の

此列せんたる子十二人、はるんどろくは
との初めを出版せんたるもの也

印譜表

墨上帳表

古画表

書畫表は、一、而もくえく、さ、敬、ま、り
帝、草、狗、子、の、横、悔、土、佐、光、記、画、巻、を、井
新、京、河、方、の、源、氏、千、二、帖、(之、比、の、画、を、精
細、さ、る、彩、も、七、と、用、入、さ、る、墨、画、を、各、に、印、を
捺、し、珍、し、し、も、の、也、) 天、海、路、正、古、画、元
人、山、所、之、横、悔、お、お、る、と、別、表、式、の、と、印、元

な、一、は、横、悔、武、甲、り、が、時、節、に、作、ら、る、
例、の、注、解、表、の、後、説、し、の、み、ま、え、と、初、め、え、
る、武、甲、一、の、注、解、表、に、あ、ら、う、さ、る、法、國、画、
の、古、画、を、二、回、の、厚、分、に、仕、立、た、る、を、(此、に、
上、を、横、悔、泉、の、本、を、傳、え、け、る、と、し、)
而、も、く、或、る、ん、た、る、也、此、は、本、朝、と、探
査、表、へ、一、二、三、の、著、者、(一、へ、一、二、三、の、自、寫
さ、る、著、者、) 七、回、列、せ、ん、あ、ら、う、と、海、舟、の、
遺、早、七、回、と、出、て、そ、う、な、る、が、あ、ら、う、著、者、
一、と、一、二、三、の、著、者、を、典、に、あ、ら、う、著、者、を、
海、舟、あ、ら、う、也、(此、は、本、朝、と、探、査、表、の、
遺、早、七、回、と、出、て、そ、う、な、る、が、あ、ら、う、著、者、
一、と、一、二、三、の、著、者、を、典、に、あ、ら、う、著、者、を、
海、舟、あ、ら、う、也、)

お湯王公遊物子唯飲地家
人多く其端却被夏軒天傳令
方車止也

在十年地方送色之約

道楽局端科有否河初頂上為激
有云云元田御云貴得一
年ハ方田

石田元激尺

扁
公平論出不主人



掛物の一こま

我を我事の目

此等の特あり聖の揚ヶえをよめお
能の文字と又を其味あると。その
空は事柄をの終末めううし
は印解合の天井を張る杖
とまはるは同歩の
おまはるは同歩の
書りも
おまはるは同歩の

りろくの提議出さる中、吏部省より登壇を
とよき全四寺に年終家づく信に有する
稀靚の因吉を御覧し、之れを登録せしめ
其の敷伏を防くとせよ一方の控を同吉
の在日非に所在を知らせし志あへしとの
あも出む他は法未とせよ季より、阿比
しと油煮せしむるをいとせん

今中余り況況、此と縁由七一場の説
説とや、薄層の記録の録もあはる
前記：別言、後付け、娯遊有、内列
うまも七公衆の笑を傳しけしとんをき

ゆる希因のま、因吉彼中の音を通を熟
らしたる時、列し、その日、程の雨を何んか
た今、此家のあはる、ある貴正、あらま、い
おと言物とるを、い、トッテ、つ、女、器、扱、ま
地口の滑然、説、終、を、出、し、な、る、も、誰、ん
七、腰、を、抱、く、と、る、と、を、し、珠、も、あ、い
う、し、し、ま、出、陣、の、片、物、を、抽、懸、る、も、一、公、衆
の、分、配、も、も、結果、御、覧、の、便、三、の、縁、由
熟、あり、ま、あ、ら、る、も、つ、き、に、し、る、も、し、

此、乃、大、會、を、年、末、也、う、ま、い、季、節、に、於、て、(一) 意、心、
せ、し、こ、と、も、い、ふ、け、地、方、ら、し、ま、く、つ、ま、ら、る、

リしるも喜ぶの事況を望し今所を充
てり南葵は文意とて十分の厚意を以つ
て歎得し茶葉并あるは何れも今所を充
たせるは格し其らん為便利と感ずること
多しとてし——目自今人の会者時代は格
く盛大の集りゆくも是を感ずるは格
也

の白眼今序と菊池の境あり篇しと作と
しりて子也此会の者起る余感ずる所
ありと美と前此の人ありて催し也
思へし近世の源流を流んて人の恩義

茶寮に主人とていへるも木十雨の人とていへる

餘興 會覽略目

(列品ハ、會覽濟、後抽籤ニテ出席諸君ニ頌フ)

○第一部 名家遺留品 遺留主下ノ如シ

小野妹子 在原業平 寂照法師 宗祇法師 伴藤仁齋 豐干禪師	物部守麿 小野篁 源賴政 信長侍女阿通 谷川士清 玄奘三藏	秦川勝 菅公遺子 鴨長明 石川丈山 狩谷板齋 蘇東坡	中將法尾 小野道風 辨慶法師 天海僧正 曲亭馬琴 ニユートン	小野小町 紫式部 無文禪師 青木敦書 惠可和尚 ラフェエル
--	--	---	---	--

○第二部 名家代表品 被代表者氏名下ノ如シ

石川丈山 井原西鶴 在原行平 烏丸光廣 胡鳳丹 鈴木脛	橋南谿 新井白石 百濟王仁 荻生茂卿 白居易 安井息軒	加藤宇万伎 林道春 冷泉為相 後藤松陰 谷川士清 塙保己一	鴨長明 松尾桃青 山崎宗鑑 韓非子 鶴峯戊申 近松門左衛門	榎本共角 室鳩巢 安藤年山 子華子 伴蒿蹊 大宰春臺
--	--	--	--	---

○第三部 雜

土佐日記 唐語林 瓦礫雜考 ゾラの名作 正史の資料 貴重本室 明治四十一年文部省圖書館事項夏期講習會課目 帝國圖書館 本會ハ長并幹事の盡力を謝する詞	袋の冊子 百子全書 北里十二時 経藏の守護者 史家卿小倉色紙 カード目錄 京阪圖書館長の競立	拾芥抄 藩翰譜 隨筆索引 古経卷 英米圖書館の恩人 兒童閱覽室備本種	佩文韻府 善庵隨筆 緒ノ善玉 五山版 圖書館の首腦者 内閣文庫
--	--	---	--

本會ハ長并幹事の盡力を謝する詞
 也如前と云ふ所の如く
 本會ハ長并幹事の盡力を謝する詞
 也如前と云ふ所の如く
 本會ハ長并幹事の盡力を謝する詞
 也如前と云ふ所の如く

を忘る師才の遺傳あり門下生の如きも少
 し〜位地を得ん内早く師恩を忘印し去
 りて遊人と其有るの徳崗すみき〜
 前修志の厄女とす〜位地を有し〜
 何んぞ遊ん見人既〜古稀を〜
 亦或を感す〜時よ及ひ閑地とあるが
 如を以つて心縁あると云ふも生才云々疎
 也如斯と世の俗漸〜と異なり〜
 斯る〜人二十餘名を説き色〜
 茶寮〜人をも迎へ〜

由亭馬琴 ニュートン
 惠可和尚 ラファエル

被代表者氏名下ノ如シ
 鴨長明 榎本其角
 松尾桃青 室鳩巢
 山崎宗鑑 安藤年山
 隣非子 子華子
 鶴峯戊申 伴高蹊
 近松門左衛門 大宰春臺

抄譜引
 館の恩人 室備本種
 佩文韻府
 善庵隨筆
 緒善玉
 五山版
 図書館の首脳者
 内閣文庫

白眼會序

至行虛也。至言白也。虛室生白。吉祥

至人之道。冲虛清白。揮斥八極。神氣不變。

成功也。雖然。吳為風。為多白眼。陰在陽下。深沈鬱

輻。激而放聲。凝而揚色。應機制宜。如彼阮叟白眼

視俗。張公白眼對吏。宗生白眼望天。慧師白眼說經。

亦至道之用也。方今之世。纖靡成俗。上下媮媚。不復見

猶介剛毅之風。於是至人虛白之跡。蕩然掃地矣。

頃者。吾儕創一會。推前島男爵於中心。男爵號白眼

居士。因取其字。為會名。蓋謂男爵雄心落落。不趨世

俗。翱翔雲臺。嘯傲江湖。能收白眼之功。吾儕之所

欽仰也。王維曰。白眼看他世上人。戴叔倫曰。白眼

向人多意氣。語稍涉矯激。然至行至言。警世

矯俗者。亦在於此中。吾儕雖駑。請誓成之。

至行

至言

至人

列子

虛室生白

莊子

多白眼

周易



実を語す所あるは出づる人 通達者しく今
矣と云ふは世に樂ありき快するも 彦彦と
るる建ち不衣衣と云ふは 依て友人をも
合するに可るものなりとんも言ふを衣の衣と
既言ふ既既し合衣を白眼人々と稱えん
もも是人の辨を重るる取つて命いしに
子也若し白眼、不平の意味ありとてん
余の上記のことと不平をこゝに寓する也
白眼人とは是しぬ個の合衣也

明治二十一年十一月廿四日 海池

○ 函末梅主陸心淨石斎自筆稿本一冊
同篇も宛は紅界佛の細書し四十枚并
のこつとを巻末の陸の子の題後ありて
一冊の書るることと決す 標題を以つて案
あり
の厚行を思し著衣る
為書家の著す 圖書界に於て珠とす
べきはと云ふと長凡を法人の著書人強ん
ど其政を因くし 幾人と其人の特色を認
め 著書人の著す 其人の著す 其人の著す
あり 余も法人の著す 其人の著す 其人の著す
る 能はる也

防河采菱

元正上英の皇居 萩 煙

今二家の人
系なり

○校者より名 花を、海しとて 揚の刻筆

陽珂採菱

天下之英 萬年を 塵

陽珂采菱 と 淮南子 に見ゆ

陽珂採菱

奏指聖者 陽珂採菱
陽珂採菱とを 考し 曲名

○養命和養の如く 言同 一色を得

間 重新 興 陰沙書 考

間 重新と大坂の如く 念を 上念
(念指) と云ひ 由 採 五印 六衛 天
文 其の 大 家 あり 伊能 志 敏 と 曰 列
の 人 也 陰 海 と 破 谷 陰 海 あり 考
ふ べし 如く 考 考 考 紙 紙 紙 陰 海
の 考 と 是 下 酉 八 月 採 菱 考

八月廿三日(日) 海と向きしあり
北人の古所ぬりて得難し如き
言者のちもて 實を 証に 改ま
らざる 古所を 後世 命を 滅滅
ゆして 得る 能く ざる 如き 雙
あり 於て 物に 此所の 古所と 改
是せざる を得ず

別と 改改度の 磨の 改正に 所する 人
此所の 由実を 見る 大改 あり 其
を 留る 命 古所 難と 難と 物況
は 是 あり 又 改 改の 如 度

こころを 得る こと
め 改 改の 改正に 所する 人
此所の 由実を 見る 大改 あり 其
を 留る 命 古所 難と 難と 物況
は 是 あり 又 改 改の 如 度
の 長 廿 日 人 一 丈 一 尺 あり
重 改の 古 所を 得 難し 如き
言の 後を 著 証に 改ま
らざる 古所を 後世 命を 滅滅
ゆして 得る 能く ざる 如き 雙
あり 於て 物に 此所の 古所と 改
是せざる を得ず

問重富は曆學者なり攝津大坂の人字は大業長瀬ト
號し晩に自から耕雲主人と號す父は五郎兵衛重光
重富は其の第六子なり兄弟皆な天す重富即ち嗣ぐ
世々典鋪を業とす屋號と十屋と曰ふ重富又た五郎
兵衛と稱す幼にして容止凝重成人の如し年甫めて十二
渾天圖を見て反覆之を翫ぶ後ち數日手自づから竹木を
採輪して一儀器と造くるに少しも差はず人皆な之と
驚歎す十七八の比ひ算法を學ぶ既にして弱冠始めて星象
の學に志し遍ねく古今の曆書を求めて之を讀み夙夜

覃思研鑽して寢食俱に廢するに至る者數年後ち
鮮廉の精確なるを知り乃ち之を專攻す後清の乾隆に
定むる所の曆象考成後編を讀みて益々發明する所あり
時に豊後の人麻田剛立と云ふ者あり浪花に僑居し曆學
を以て聞申因て執貝と執り往きて見申剛立嘗て緯星
周天の數に疑ひあり後ち其の術を得ると雖も未だ其の
所以を究めず重富乃ち天行方數諸曜一に歸するの理
を聞申聞き録して以て之を示す剛立宿疑忽ち釋く
乃ち歎じて曰はく窮理微に入る惟々の間氏あるのみと
蓋し方數の説既に著はして鮮書に在り而して其の書當時

猶ほ未だ舶來せざる本邦國とより未だ言はざる所漢土亦
此くの如きものなり然れども剛立始めて能く其の術を得其の
理は則ち重富を待ちて之を發すと云ふ重富嘗て望遠
鏡と舩し衡視心差の法を加ふ亦た其の製する所の儀
器十數に下らざる而して尤とも其の用ある者は曰く垂搖
珠儀曰く測食定人刀儀常に工人を家に養ひ凡る作
る所あれば必ず面諭指畫して差繆なかりしむ重富の
算數に於ける亦た算法孤矢索隱一篇と著はし又た
尺度を考索して其の古今同異を辨ず皆な曆學の
緒餘に出ざるなり寛政中官に改曆の擧あり七年徵

月留日こま

されて江都に赴き曆局に留在して其の等に與りたる
曆成るに及び廣人食宅地を賜はり且族を稱し旅次非常
に際し刀を佩るを許さる居ること三年休暇を賜ひ仍ほ郷
に在りて測候せしむ享保和三年旨を奉じて長崎に赴
き食限を査驗し且邊海の里程を測候す文化中
曆官高橋東岡死す因りて復た重富を召す東岡
嘗て命を奉じて長崎に西洋新法曆書を譯す未だ
成らず嗣子觀巢續て之を成す重富亦た與りたる府
に留ること六年暇を乞ひて郷に歸り幾ともなく病に罹
りて歿す時に文化丙子なり年六十一重富人となり深沈

にして習あり人の爲めに謀りて其の心を盡しき郷人事の
處し難き者ある毎に必ず来りて重富に就きて諮詢
す重富爲のに之に處して其の肯綮に中たる是を以て
人益々嚮往す又た技能の士を愛し窮して衣食する
能はざる者あれば即ち自ら減じて之に給す子重
新字は盛徳業を継て家聲を墮さず(墓誌野史)

間長雄專攻西輝曆晴豊後人麻田剛立居大坂
以曆學一聞因贊執往見剛立於緯星
周天之數雖得其術而未究其所以然

早稲日く長雄

長雄乃聞天行方數諸曜歸一之理
錄以示之剛立宿疑忽解歎曰窮理
入微海内惟有一間氏而已(續近世叢誌)

○秦雅樂者始於陽阿採菱許慎曰楚邯鄲有淮南曲者樂之名也託之李奇諸人皆爭字之後知其非皆棄其曲此未始知音也李奇楚之善樂者也

○欲學歌誣者必先徵羽樂風欲美和者必先始於陽阿采菱陽阿采菱樂曲之和聲有陽阿古之名俳善和也

○事有所至而巧不若拙故聖人量鑿而正柄夫歌采菱采陽阿鄙人聽之不若此延路陽阿非歌者拙也聽者異也(以上淮南子)

楚辭曰陳鐘索鼓造新歌涉江採菱采陽阿二人齊

容起鄭莊莊若交竿撫案下等瑟早稻田大學圖書館狂會填鳴鼓官廷震怒馬兇激楚

繞文章軌範所載宋玉對楚王問中

客有歌於郢中者其始曰下里巴人一國中屬而和者數千人其為陽阿薤露國中屬而和者數百人其為陽春白雪國中屬而和者不過數十人(中畧)是其曲彌高其和彌寡

襄陽耆舊傳云左如之作也

始而曰下里巴人國中唱而和之者數萬人中而曰陽阿採菱國中唱而和之者數百人既而曰陽春白雪

○天文中慶孫法師刻了所の陀羅尼
集經の版本帝四子圖考終に在りて
右の如く彼在りて其原本一部を余が好
く添稿に云

陀羅尼集經

六部

右以て終收貯天文年中慶孫法師
師所刻舊板新金工印摺十有五
部之一恭奉納す

赤城山春成寺玩古院我樂寺入新
伏款因功縁自今及古殊深厚係
概提擲莫不到岩の沈若雍派漸

東
大
藏
經

黃鐘第廿五其具非全到後此敬

白

知りて古經よりし得たるの事ありと此
添稿卒爾の作らんもめをえんよ



口前記問五平兵衛古簡最印手打さるる一
考へ後治河の名をさるると思ひ白紙み治河の
不らさるるは治河の一とせん一と定率うす
市と同代さるるが干支をさるるは念す
めると大徳一とせんはあつたむ日代さるる
むかしはさるる市とせんは二十才のめり
市とせんはさるるはさるるはさるる
市とせんはさるるはさるるはさるる

愚按

重富重新ト時ヲ同ラセシ滄洲ノ辨アル者ハ磯谷滄洲

元文三年生享和三年没

赤松滄洲

享和六年生享和元年没

二人ニシテ

書簡日附ノ丁酉ノ干支ヲ考フルニ安永六丁酉年

明カシシノ安永六年ハ重富二十才磯谷滄洲四十二

才赤松滄洲五十八才ニ當ル磯谷氏ハ尾張人

赤松氏ハ播州赤穂人ニシテ重富未ダ遠遊セザリシ

如キヨリ見レシ書中ノ宛名タル滄洲ハ大坂ニ近ク

而カモ磯谷當時ニ於テ磯谷氏ヨリ名ル赤松滄洲

ト思ハル時疫云レハ西氏共ニ所見典之若シ

重富ノ書簡トスレバ天保八丁酉トナラザルベカラス

早稲田大学 圖書部

天保八年重新ノ手簡トスレバ當時ニ滄洲ナル字者

ノ有リシヲ知ラズ磯谷赤松西氏共ニ享和申没シ

テ滄洲トシテ名アリシモノヲ見ズ依テ之ヲ統

考スルニ間五郎兵衛ハ重富ニシテ重新ニ非ズ

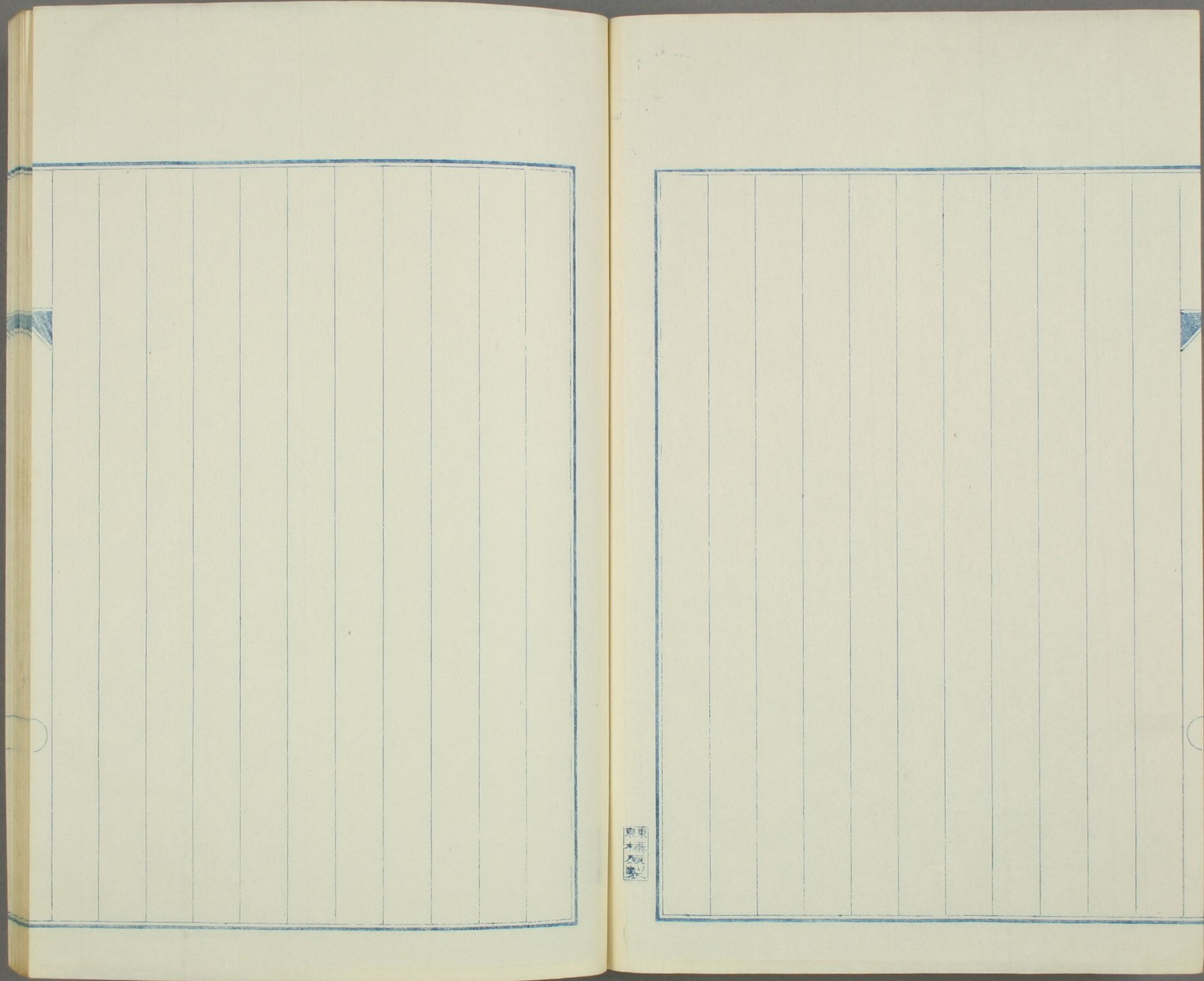
滄洲ハ赤松滄洲トスルヲ當シリトセン事

陽阿采菱ノ追考

○陽阿ハ古楚ノ地名ニシテ歌曲ノ名ニ入りシモノカ阿ハ隅ナリト

云ニ字義ヨリ古来地名ニ入ルモノ多ク周漢時代ニ曲阿

東阿西阿平阿石阿祝阿廣阿三阿下阿阿



東
林
風
琴

以下
16 丁
白紙

形如公力之入去也

